

九学会連合能登調査と和歌森太郎

一 問題の所在

本稿は、一九五二年（昭和二七）から二年度行われた九学会連合能登調査において、和歌森太郎（一九一五―七七）の果たした役割について考察する。同総合調査については、本誌四二号（二〇一一年）に寄稿した拙稿「九学会連合調査と加能民俗の会」に続く、第二段の考察となる。この前稿で地元石川県からこの調査に参加した研究者の動向に触れたので、本稿ではこの件に一切触れない。

本稿でとくに和歌森太郎に注目するのは、彼が同総合調査において日本民俗学会を代表する位置にあった、と考えられることに依る。最終の公式報告書『能登―自然・文化・社会―』（平凡社、一九五五年）には、初年度の企画委員（同書四八六頁）、第三班「能登半島の日本文化史に占める位置―

近世を中心に」班長（四九三頁）と記され、第二年度は第一班「能登半島における文化の伝播の研究」Cグループ「能登半島における民間伝承の比較研究」に、筆頭で彼の名前が出ている（四九五頁）。

また、この調査に地元から参加した山下久男の回顧によれば、調査開始に先立つ一九五二年四月二九日、金沢市池田町の郵政会館で行われた会合に出席のため、和歌森も来沢していたとされ、それに関する記載でも和歌森が日本民俗学会を代表していたように思える¹⁾。

その一方で、彼は上記の『能登―自然・文化・社会―』に執筆していないこともあり、この総合調査への寄与がどのようなものであったのか、これまでほぼ考察がなされてこなかった。

和歌森については近年、敗戦後に大学での民俗学（アカデ

由谷 裕哉

ミック民俗学)が確立するにあたって中心的な役割を担ったと考えられるようになり、その行論が注目される傾向にある^②。筆者も最近、和歌森について考察した拙稿を複数著したこともあり^③、本稿でこのようなテーマを設定した次第である。もっとも、当該テーマを構想し準備する過程で、二〇二四年一月一日に奥能登を大地震が襲ったことにより、こうした問題の考察が現状で意義を持つのかどうか筆者には分からなくなつた。そのような混乱を踏まえつつ、とりあえず以下、準備してきた議論を進めてゆきたい。

二 敗戦後、九学会連合対馬調査 (二九五〇—五一年度)までの和歌森太郎

和歌森太郎の戦前戦中期については二〇二二年拙稿(前掲注3参照)で述べたことがあるので、ここではごく簡略に触れるに留める。

彼は一九三九年(昭和一四)に東京文理科大学を卒業し、その年のうちに北支に従軍するも、翌一九四〇年に胸膜炎により除隊し、東京文理科大学副手(一説に助手)に戻つた。柳田國男の木曜会への参加についても諸説あるが、上記拙稿

では一九四一年(昭和一六)五月説をとっていた。

この後、柳田國男の推薦によつて一九四二年に国民精神文化研究所の嘱託となつた。上記拙稿でとりあげた大洗調査はこの研究所の事業の一環として行われたものであり、彼の戦中期における代表作『修験道史研究』(河出書房、一九四三年)も、この研究所の嘱託だった時期に出された。戦後の和歌森はリベラルな姿勢で知られていたため、この超国家主義的な組織に嘱託ではあれ関わっていたことに、ほぼ沈黙している。本節では以下、敗戦後の和歌森について三つの観点から概要し、それぞれ位置づけることに傾注したい。

(1) 『日本民俗学概説』(一九四七年)

和歌森の『日本民俗学概説』(弘文堂、一九四七年)は大学での民俗学講義用に作られたと推察される書で、その意味では本邦初のアカデミックな民俗学概説書ということになる。

第一章で、民俗学の究極の目的は民俗の変遷過程を明らかにすることであり、これを民俗史学と云つて良い、とする(四頁)。民間の伝承文化は基層文化であり、それは表層文化に対するもの、ともする(六一—七頁)。伝承文化としての民俗

を厚く担っているのは、村落協同体である、ともされる（八頁）。

民俗の性格規定としては風俗と比較し、風俗が土地による習俗の違いを意味し、横に伝わる空間的な伝承性を有するのに対し、加えて縦に世代的な伝承性を有することが、民間伝承としての民俗の所以である、とする（一二頁）。民俗と風俗との比較についてさらに、民俗は、これを伝承する協同体の伝統的意志表現ともいふべき、強い規範性を帯びている（二三頁）、などもされる。

この章の参考文献として和歌森は、務台理作『社会存在論』（弘文堂書房、一九三九年）と同『表現と論理』（同、一九四〇年）を掲げている（二八〇頁）。

務台理作（一八九〇—一九七四）は西田幾多郎の弟子で、台北帝大教授などを経て一九三五年に東京文理科大学教授に就任している。先述のように和歌森の同大卒業は一九三九年であり、既に学生時代から務台よりかなりの影響を受けたらしい。和歌森は後年、「実は大学在学中、私は務台理作教授の哲学の講義にひきつけられていた。当時務台理作は、ナウマンの基層文化・表層文化論を紹介され、伝承文化とか民俗とかいうものについて、すばらしい講義をなさっていた。も

ちろんそのさい日本民俗学に関してもよくふれられていたのである」、と語っていた⁽⁴⁾。

そのこともあるのか、務台理作による伝承文化論の和歌森への影響については、比較的早くから注目されていた⁽⁵⁾。ということ、和歌森が参照している務台の議論を一瞥しておく。

和歌森が参照する務台論文の古い方「伝承的文化」（初出一九三八年、『表現と論理』所収）では、柳田『民間伝承論』（共立社書店、一九三四年）に触れながら伝承的文化を規定してゆく。まず、伝承 tradition とは、郷土人が集団的かつ実践的に繰り返す類型的かつ古風なものを残すもの、とする。歴史との関わりでは、伝承は歴史を生むものとされる。民俗学では伝承文化の捉え方に、人類文化を見出すものと民族文化を見出すものがあるが、そのことよりむしろ、文化に上層的なものと基層文化という二極があることの方が重要だとする。

次に、伝承文化を次の三つに分けて位置づける。①類型的な繰り返し（例えば、親の世代から子の世代へ）、メタモルフォーゼの中に自己同一性を有する、②繰り返し返される基礎に、集団的な実践性がある、③この実践性が特殊であること。

最後に、(時局を意識してか) 基層文化と上層文化とが国民文化へ、とされる。

もう一つの「種的社会の質料契機としての伝承文化」(初出一九三九年、『社会存在論』所収)は、掲載書では第五章の三「個体即普遍と特殊即普遍」後半部の「附」に相当する。伝承文化の研究(民俗学)の姿勢に、人類文化の普遍を求めると民族精神の探求とがあるという議論は、前論の繰り返しである。後者の民族精神に関しては、伝承の主体性、集団生活の表現、特殊性、封鎖性を指摘。そこで問題となる民族精神は、ヘーゲルの客観的精神に通じ、それを文化の構造として示す必要がある。伝承文化に対応するのは基層文化である。それが上層文化と共に国民文化に統合されるべき、とするのも前稿と同である。

以上のうち、和歌森が伝承文化の布置を基層文化と呼んだことは、既に一九四三年の『修驗道史研究』で書き下ろし箇所であった「結語」にも見られる。しかし、『日本民俗学概論』や「民俗学の歴史哲学」(『歴史』一一二、一九四八年)における伝承論では、務台の伝承文化論のうち類型的な繰り返しにより世代を超える、といった趣旨の表現を採用したと思われるのが主で、務台における主体性なり実践性は省みられな

いのではないか。

また、和歌森のとくに「民俗学の歴史哲学」における Stie の有する倫理的な規範性は、務台にも封鎖性といった視点があつたものの、おそらくそれは別の所から着想を得たのではないだろうか。和歌森は同論考で、「伝承には、スイツテとかカストムというもの、いわば習俗というものもつ性質を多分に帯びている。子供が産れて三十三日経たとき、宮参りさせるものだという親先祖以来の伝承があるのに、これを自分の子供の場合に欠かさせることにはいささか不安が伴うということがある場合、例えばその後何か子供にまちがいが起ると、これを怠つたからではないかと案じたりすることがあるところでは、このしきたり、習俗は、そこでは倫理的規範性を帯びているわけである」⁶⁾、云々と記していた。

なお、custom については柳田國男が『民間伝承論』で議論していることもあり、あるいはそれを念頭に置いていたのかもしれない⁷⁾。ともあれ、和歌森『日本民俗学概論』における村落協同体内の習俗が強い倫理的規範性の背景となるという主張は、おそらく務台とは別の典拠によると思われ、今後の検討課題となろう⁸⁾。

(2) 『国史における協同体の研究』上巻(一九四七年)と

『中世協同体の研究』(一九五〇年)

上記のように和歌森は、伝承文化としての民俗を担う場を村落協同体とし、そこで民俗が強い規範性を有するとしていた。その協同体について彼が歴史民俗学的な観点から考究したのが、この二著作である。本稿のテーマと直接関わるものではないので、ごく簡単にしておく。

『国史における協同体の研究』上巻(帝国書院、一九四七年)は、上巻のみの刊行であった。

第一章「上代の族縁協同体(その一)」は縄文・弥生から始まる。同章の後半は奈良時代の戸籍第二章同上(その二)は、母系制社会が日本にあった、的な話から、氏族の協同へ。

第三章「氏神・祖先神・産土神」で、ようやく神社論となる。このうち氏神については、和歌森が一九四一年の木曜会入会後に複数論考を書いているので^⑧、それとの比較検討が必要になろう。とはいえ、同書の前半分くらいは協同体論とほぼ無関係だし、本節(一)で参照していた彼の民俗学的な伝承論も、この半分には出て来ない。

『中世協同体の研究』(弘文堂、一九五〇年)は、『国史における協同体の研究』上巻と併せて、和歌森の学位論文となっ

た^⑨。「協同体」という表現だが、「神社を通路としての協同体研究」の序がある本書全体が神社祭祀論となっていて、とくにその祭祀組織およびそれと関連する宗教心(神観)に焦点が置かれており、『国史に……』とは立脚点がかなり異なる^⑩。全体の流れは先行研究が要約した通り、古代の族縁協同体に対して中世では地縁協同体が生まれ、ここでは古代の氏族が変わって産土神や鎮守神が協同体の守護神となった、という方向の議論であろう^⑪。

第二章「神主と頭家」で「祭祀組織の類型」が一四類型提示されるのが、九学会連合能登調査での頭屋制の類型(後述)に継承されたと思われる。この点について少しだけ見ておく。

① 家族の族長が主宰者となる、② 族長が主宰者となるのは①と同じだが、族員が輪番で舗設者となる、③ 族長族員を問わず、氏人が主宰者舗設者となる、④ 氏子が地縁協同体の氏神を主宰舗設(原田敏明の事例^⑫)、⑤ ④と同様に輪番で主宰舗設するが、交替の際に神社への奉幣渡御が頭著、⑥ 輪番ではあるが、主宰者と舗設者との差別がある(出雲八束郡の美保神社ほか)、⑦ ⑥とは逆に、主宰者が後輩者より出る、⑧ 主宰者舗設者のいずれかが特定の家の場合(出雲八束郡の神魂神社)、⑨ 主宰者に世襲神主、舗設者に氏人の輪番の

他、輪番制の神主も（京都愛宕郡大原村小出石の座）、⑩⑧と類似するが、主宰者が氏子の最年長者、⑪⑩と逆に主宰者が輪番で、鋪設者が家筋として固定、⑫主宰者鋪設者が氏人の中で限定、⑬主宰者鋪設者を経験した者が世話人になる、⑭神社と歴史的関係を持つ氏人が主宰者鋪設者になる（同書一〇七—一二七頁）。

以上、きわめて細かな分類がなされているが、本稿の趣旨からしても、ここで軽々に評価することは避けたい。本書が再録された『和歌森太郎著作集』第一卷（弘文堂、一九八〇年）では、木村礎、門脇禎二、和歌森民男の三人が解説を執筆しているが、いずれもこの一四類型には触れていない。それは、この一四類型の評価が難しいことに依るのではないだろうか。

（3）九学会連合対馬調査（一九五〇—五一年度）への参加
九学会とは、人類学、民族学、民俗学、社会学、考古学、言語学、地理学、宗教学、心理学であった。対馬調査は日本が占領解除になる前の総合調査であり、第一年度には朝鮮戦争が勃発した。この総合調査に関する先行研究によれば、当時心配された難民は対馬に押し寄せなかったとのことである

が、この調査の結論であった「対馬は日本」だという総括は、李承晩への対抗や朝鮮戦争勃発というバイアスがあった可能性がある、とされる。東京文理科大教授であった和歌森は、「対馬における神事の研究」を担当した⁴⁰⁾。

この対馬調査の報告書は二冊出ている。『漁民と対馬』が関書院より一九五二年に刊行、『対馬の自然と文化』が古今書院より一九五四年に刊行された。前者には日本民俗学会より瀬川清子と直江廣治が執筆し、後者にはこの二人の他、竹田旦、大間知篤三、井之口章次が執筆している。和歌森は、櫻井徳太郎と連名で「対馬の伝承的信仰」を執筆したことになっているが、『和歌森太郎著作集』別巻（弘文堂、一九八一年）の年譜では、「桜井徳太郎氏執筆を和歌森名義で」（同書二二七頁）とされている。もともと、同年譜はしばしば不正確で、「名義」ではなく実際には櫻井との連名になっているので、検討の余地は残る。

というところで、櫻井との共著論文に和歌森がどれほど関わったか不明なので、九学会連合の対馬調査に関わる和歌森唯一の単著論文であると思われる（他に学校教育に関する論考があるが、上記のように彼の担当であった神事研究はこれのみ）。「対馬の天童信仰」（『人文』一一、一九五二年）を

瞥見しておく。筆者は、和歌森の『歴史と民俗学』（実業之日本社、一九五一年）に再録の形態によつてこれを読んだ。

まず、三品彰英『日鮮神話伝説の研究』が豆餿の天童地の伝説や関連する祭儀に注目し、東垂の古い神話などとの関係を考察したのに対し、豆餿に限定することなく各天童地での信仰実践を考察すること、島民の全生活との関わりやその変遷を考察すること、を指摘したとされる。各天童地での他の聖性の呼び方（シゲ、天神など）が纏められ、天童伝説の諸相（崇る、御子神など）も概要される。天童関連聖地での祭祀については、祭場は原始的、祭日は旧暦の正月、六月、一月のいずれかに集中する。加えて、天童信仰は日の出と関連するとして、その事例（阿礼のオヒデリサマ、他に仁位、木坂など）が複数紹介される。

結論として、天童がテントウサンとも呼ばれ、母子神的性格を持つこと、そこから百姓の神と称する場合もあること、内地の天童は祖霊信仰と結びつく傾向がある、などとされる。和歌森が一人で調査データを集めたのかどうか分からないし、¹⁰⁾ 個々のデータの蓋然性も不明だが、二〇二二年拙稿（前掲注3）で取りあげた一九四二年九月の大洗調査などと比べものにならないほど、集められた情報は多い。

三 九学会連合能登調査における和歌森太郎

九学会連合能登調査は、初年度は一九五二年七月中旬から八月中旬まで（班によつて日が異なるらしい）、第二年度は一九五三年七月二〇日過ぎから八月二〇日まで行われたとのことである（『能登―自然・文化・社会―』、四八六―四九〇頁）。

和歌森は、上記のように一九五一年（昭和二六）七月、文学博士の学位を授与された。それ以前に、一九五〇年三月には東京文理科大学教授となつている¹⁰⁾。能登調査の時点で和歌森はまだ三〇代後半だったことになるが、学位もあり、日本民俗学会からの参加者の中では最も社会的地位が高かつたことから、結果的に同学会を代表するようになったのである。

具体的に地元以外の参加者と比較すると、瀬川清子（二八九五―一九八四）は年齢ははるかに上だったが、瀬川は民俗学研究所員として参加していた。他に同学会からの参加であった堀一郎（一九一〇―七四）も和歌森より年上で、戦時下の国民精神文化研究所では彼の先輩だったが、二年度目のみの参加であった模様（東北大学教授）。同じく日本民俗学会からの参加であった平山敏治郎（一九一三―

二〇〇七）は大阪市立大学助教授で、『人類科学』VIでは「日本民族学会」とされていたが、これはおそらく誤植であろう。彼も和歌森より少し年上だったが、教授ではなかった。

公式報告書に瀬川および平山と共に執筆した櫻井徳太郎（一九一七—二〇〇七）は、和歌森より年下で東京教育大学助手。関敬吾（一八九九—一九八四）、宮本常一（一九〇七—八一）は日本民族学会からの参加で、こちらも和歌森より年長だったが、関は東京学芸大講師、宮本はフリー（常民文化研究所研究員）であった。

以下、和歌森の九学会連合能登調査に関わるアウトプットを概要するが、その前に、一九五二年一二月に熱海で行われた座談会『「能登の実態」』（勁草書房、一九五四年）で、彼が第二部「古い能登のおもかげ」の司会を担当しているの、少しだけ見ておく。

九学会に歴史の学会が入っていないので、自分たちが担当した、という前振りで、荘園の時代に真言が繁栄した、また近世への転換について畠山文化を参照する。特殊な職業として輪島の漆器業などに触れる。近世についての若林喜三郎の報告に付記して、天領地について参照する。四柳嘉孝による田の神信仰の話に続き、山祭り¹⁰と山の神について議論が少し

あって、次に日本宗教学会の池上広正の報告に繋ぐ。そこで真宗が触れられたので、櫻井徳太郎の蓮如忌の報告へ。真宗繋がり¹¹で日本社会学会の森岡清美の報告へ。新宗教について日本宗教学会の柳川啓一の報告へ。終わり近くに日本民族学会の宮本常一からの真宗についての質問があり、日本社会学会の小山隆や日本民族学会の関敬吾による発言もあり、和歌森担当パートは終わる（同書四六—七三頁）。初年度の報告書『人類科学』VI（中山書店、一九五四年）に和歌森が書いた「奥能登における民俗調査上の問題点—概観—」も、この時の議論と似通っていた。

それでは次に、和歌森が九学会連合能登調査に関連して書いた二つの論考を概要する。

「宮座の解消過程」（『日本民俗学』一一二、一九五三年）…鳳至郡（当時）を中心にした宮座類似の祭祀組織における頭屋制（柳田グループの用語法）を、AからIまで類型化して紹介し分析した論考である。肥後和男の宮座調査¹²が参照されるも、そのような祭祀への参与調査をおそらく一つもしていないと思われる。

A型…家並み順に、数戸ずつ頭元を務める。羽咋郡鉦打村藤ノ瀬の諏訪神社。

B型.. 数戸ずつは同じだが、有力なオヤツサマ格を必ず含む。鳳至郡鵜川町柿生字神道^{柿生字}。

C型.. 経済力がほぼ均等になるような組があらかじめ作られ、組として頭元を務める。同郡諸橋村字加川の八幡神社。

D型.. Cとほぼ同じだが、組が地域的にまとまり、直会を組の「キダ親」の家で行う。同村明泉寺白雉神社。

E型.. Dに近いが、組が相互の平均化を考えず、家並み順。同郡柳田村柳田の白山神社。

F型.. 毎年二戸ずつ頭元を務め、それが本家・分家の組み合わせ。同郡浦上村安代原^{あんだいばら}。

G型.. いくつかの名組では、代表者の決め方がばらばら。同郡鵜川町天満宮のいどり祭。

H型.. オヤツサマ級のものだけが組を形成して、各組の輪番で祭祀。同郡住吉村中居字中居南の日吉神社。

I型.. 頭元を神籤で決める。同郡穴水町川島の御間那比古神社。これは、通称白山神社と記されていることを含めて、かつて白山社を合祀したと伝えられる美麻奈比古神社のことではないかと思われる（穴水町川島に、御間那比古神社は存在しない）。

以上を踏まえた和歌森の議論は、およそ以下のようである。BはAに先行するとするが、根拠はBが明治四三年から家並み順に組むことにしたから。Iは典型的な頭屋制で、Aが宮座制に近いとするが、それはAで家の力に大小差があるためとされる。

Bと同工異曲だが規模の大きいのがDとEで、全勢力の平衡をはかっているEが宮座時代に近く、力のうえで互いが平均化しているDに先行する。Cは特定の親分格の家が重い役割を演ずることがないので、Dより新しい、ないしその崩れた形。

本家分家が協力して頭元となるFは、EやDCと同じ系列ではなく、部落内の身分階層に従って上下を合わせ組むBよりも古態か。Gは宮座制の直後形態と思われる、Fと比較すべきでなく、EやDと比較の意味がある。Hは、頭屋制ではなくほとんど宮座制であり、そこからFのような分家筋を伴って構成することになる。

いずれにしても、「宮座制」も「頭屋制」も各々の用語が明確に定義されていないので分かりづらい。かろうじて冒頭に、宮座を構成するのは特定の家のみだったのに、「部落の戸主誰もが頭屋をつとめ得る形へと進んだ」（掲載誌二頁）

云々とあるので、宮座制の解体↓頭屋制、と考えていた模様ではあるが。

以上のデータ出所としては、鶴川町のB、G、穴水町のIについては、『鳳至郡誌』（同郡、一九二三年）に詳しい情報があり、うちGについて和歌森は、長岡博男「鶴川天満宮の「いどり祭」に就いて」（『加賀文化』一四、一九四〇年）を参照している。Bは、同地住民所蔵の冊子を参照している。その他は、各々の地の話者によると思われるが、上述のように宮座によつて執行された神事への参与調査は無かつた模様なので、B、G、I以外のデータはかなり怪しい可能性がある。

また、既述のように、『中世協同体の研究』第二章における祭祀組織一四類型を念頭に置いていたと思われるが、こちらは上記B、G、I以外ではCおよびHの情報があるところである。従つて和歌森の上述のような変化図式も、どこまで妥当かは疑問であろう。

和歌森の結論として、「伝承が多くとどめられているのは、村落社会の発展がにぶ」いせいであるから、「同じような条件の、日本の僻地の祭祀組織・頭屋制を再検討」すべき（同一七頁）、といった僻地視で終わっている。

「奥能登における弥勒信仰の伝承」（『人類科学』六、一九五四年）…弥勒の伝承は、真宗、真言宗、曹洞宗など宗旨とは無関係とする。「弥勒の世」という言い回しが町野町、住吉村、諸橋村で見られるとする。これは、弥勒下生の思想に基づくとし、「ええじゃないか」などを参照する。弥勒の浄土がどこかという伝承は見られない、ともされる。

弥勒下生による繁栄の内容を示す伝承として、いくつかをあげる。米のみを御神体とする美漏久玉津島神社（町野町広井、明治四〇年に被合祀され廃祀となつた）、「弥勒の本地は米三粒」という言（柳田村柳田）、田の神とは弥勒さん（松波町時長）、弥勒田圃（鹿島郡南大吞村東浜）、等等。八八歳の米寿に弥勒の地位を授かる（柳田村、珠洲郡正院町岡田、町野町時国、鶴川町神道）。以上、弥勒と田の神ないし稲作との結びつきが顕著な例だとされる。

能登で弥勒信仰が予想以上に濃かつたのは、アエノコトのように田の神信仰が顕著な地方であることに負っているであろう、と結論づけられる。

ほぼ同時期に刊行された和歌森の『日本民俗学』（弘文堂、一九五三年）において、弥勒信仰について主に能登を例に何箇所かで触れている（四六頁、五五―五七頁、六〇頁）。し

たがって、触れている事例については和歌森自身が確かに聞き取りをし、印象に残ったものである（上述した中では、美漏久神社、八八歳、田の神など）。

また、これもほぼ同時期になるが、和歌森は「近世弥勒信仰の一面」（『史潮』四八、一九五三年）を著している。ここでは、「ええじゃないか」と近世の弥勒信仰との関わりが主眼となっていた。

なお、和歌森が公式報告書へ執筆しなかったことは、先の対馬調査でも櫻井徳太郎と連名の論が有るのみだったので、そのことに執着がなかったとも考えられる。座談会での司会のように、オーガナイザーとして活動しなかったということだろうか。あるいは、彼が取りあげた頭屋制や弥勒信仰は能登の宗教文化を代表するものではない、という自己評価があったからかもしれない。

一方で、二〇一一年拙稿で指摘したように、日本民俗学会は金沢大教官以外の地元からの調査参加者に、九学会連合の会誌『人類科学』や公式報告書への執筆の機会を与えなかった。考古は石川県の会員が執筆しており、民族もフリーの宮本が執筆していたので、和歌森がこのことに関与していたとすれば、彼の権威主義的な一面が表れたとも考えられる¹⁰⁾。

もつとも、この件は憶測の域を出るものではない。

四 東京教育大学の民俗総合調査と比較しての九学会連合能登調査における和歌森太郎

前節では、和歌森が九学会連合能登調査に関わって執筆した事例研究二編を概要した。そこから、同調査における和歌森の位置を浮かび上がらせる為に、彼が一九五八年（昭和三三）から文部省（当時）の科学研究費の交付を受けて推進した、東京教育大学の民俗総合調査と比較してみたい。この共同調査は九年間行われ、調査地は順に国東、宇和地帯、西石見、美作、淡路、志摩、若狭、陸前北部、津軽であった。

とはいえ、最初の二年ほどは批判が多く出された由であるので¹¹⁾、能登と同じ日本海側を対象とし、浄土真宗が比較的有力なことも能登と共通する西石見調査の報告書である、『西石見の民俗』（吉川弘文館、一九六二年）を比較対象に選定したい。調査時点は、能登総合調査の第二年度（一九五三年）より七年後に当たる一九六〇年八月が本調査で、同月一七日から二七日までとされる（上記書四〇六―四〇七頁）。公式

報告書の刊行も、『能登―自然・文化・社会―』が一九五五年であったので、七年後ということになる。和歌森は調査時、四〇代半であった。

上記のように、本調査の期間が一〇日余りと、二年間に渡つてほぼ一箇月ずつ行われた能登総合調査より圧倒的に少ない。とはいえ、上記報告書に記載された和歌森以下の調査メンバーは、院生学部生を含み計三八名であり、民俗班が数名であった能登の場合よりはるかに多かつた。このうち教官側は、和歌森を団長とし、東京教育大の直江廣治（副団長）、西垣晴次、櫻井徳太郎、竹田旦の他、萩原龍夫（東京芸芸大）、千葉徳爾（信州大）ら。研究協力者に地元の牛尾三千夫、石塚尊俊、院生・学部生に宮田登、福田アジオ、平山和彦らの名が見える（宮田は報告書に執筆もしている）。

以上により、調査期間はかなり短かつたものの、民俗の共同調査としては九学会連合能登調査より充実していたと考えられる。筆者の問題関心からすれば、萩原竜夫「神社祭祀」の末尾で、当地の神社整理の詳細が述べられているのが興味深い（同書一九七頁）。また、直江広治「森神信仰」が、いわゆるインテンシヴな調査報告ではないが、荒神や森神の類を詳細に報告している。

和歌森の「西石見民俗の地域性歴史性―結びにかえて―」は、以下のような内容であつた。

①「東西民俗圏の中で」では、神楽、盆踊りや田植え行事について、出雲をはじめ山陽道や九州との比較がある。森神、仕事着などについても同。西石見の民俗の基層は西日本のだが、東方の中央的なものが覆つた、ともされる。②「自然・歴史・民俗」では、エキと呼ばれる山間の耕地、その辺りを支配する益田氏、大地主制、祭祀組織における名、擬制的親子関係が地縁集団相互に結ばれること、近世の津和野藩と浜田藩との比較など。③「民俗の歴史的位置と真宗」では、安芸との盛んな交渉を前提に、石山合戦を契機に浄土真宗が伝わつたこと、安芸門徒と比べて古俗を残すこと、結論としては当地の民俗から遡源できるのは室町後期から戦国にかけてで、益田氏の活動が一つのポイントで、それが大内氏毛利氏に遮断されたのが第二のポイントで、真宗にまつわる習俗はその第二時点と軌を一にする。

以上、短期間ながら三〇数名の調査データに基づいていることもあり、明らかに能登調査における和歌森言説より充実しており、下位地域への目配りも効いている。とくに、サブ地域相互で同一の民俗事象（芸能、親族、森神など雑神、等

など)を調査できたため、サブ地域毎の差異から歴史を導くうとしている。これは、いわゆる重出立証法的な手法と思われる。

この西石見の総合民俗調査を参考に、九学会連合能登調査における和歌森の姿勢を想起すれば、以下のような諸点を指摘できるであろう。

○ 対象とする中範囲の地域は、和歌森が主宰した民俗総合調査の場合、あるいは周囲論²⁰⁾を念頭に置いて、人口密集地でなく村落が比較的多い中範囲の地域が選ばれたと考えられる。能登の場合も僻地として選ばれたことは、吹き溜まり的な半島であり、「古くからの形質を比較的改变せずに残している」という渋沢敬三の『能登―自然・文化・社会―』への序文でも明らかであろう。

○ そのような僻地で和歌森がやりたかったのは、選ばれた中範囲の地域を構成するサブ地域毎に類似の民俗事象(頭屋、弥勒信仰など)を比較し、重出立証法的に変遷を捉えることだったのではないか。

○ 現地への寄与は、おそらく考えられていなかった(民俗総合調査については不明)。

五 小括

和歌森は、九学会連合の次の総合調査である奄美(一九五五―五七年)には参加しなかった。東京教育大学の民俗総合調査は、これが終わった一九五八年から始まったので、和歌森による二度の九学会連合調査への参加経験は、この民俗総合調査に役立ったというだけかもしれない²¹⁾。和歌森が能登調査以前に熱心に取り組んできた協同体論や習俗Siteに関する考察は、頭屋制に関する論考に若干生かされたかもしれないが、論旨の中心に位置していたかどうかは微妙であろう。ともあれ、この民俗総合調査によって、アカデミック民俗学(講壇民俗学)の基礎が築かれたと考えられる。和歌森の能登調査に関わる二つの論考は、そこに至る礎の一駒に過ぎなかった、という見方もできるであろう。

注

(1) 山下久男「渋沢先生と私」(『加能民俗』六の一、一九六四年)。能登調査の会長が渋沢敬三で、同会の能登委員会より四月二八日に招集の電報があり、翌二九日

に郵政会館に出かけたという回顧の後、次のように書かれている。「地元側からは、若林喜三郎、岩井隆盛、小倉学、高堀勝善、四柳嘉孝、長岡博男の諸氏と私。委員側からは、渋沢敬三、和歌森太郎、金田一春彦、駒井和愛、武田良三、桜井徳太郎の諸氏の他に二名、朝日新聞記者の牧田茂氏も来ておられた」(同号二頁)、とあるように、渋沢の次に和歌森の名をあげていた。

- (2) 例えば、柏木亨介「和歌森太郎の伝承論における社会規範概念」(『史境』五九、二〇〇九年)、加藤秀雄「伝承概念の脱／再構築のために」(『現代民俗学研究』四、二〇一二年)。

- (3) 由谷裕哉「和歌森太郎の一九四二年九月大洗調査」(『大洗の本』三へ大洗博覧会二〇一二実行委員会、二〇二二年)、同『修験道史研究』成立考―和歌森太郎と木曜会入会との関わりに注目して―(『山岳修験』七三、二〇二四年)。

- (4) 池田彌三郎・宮本常一・和歌森太郎『民俗学のすすめ』(河出書房新社、一九六五年)、一九〇頁。

- (5) 平山和彦『伝承と慣習の論理』(吉川弘文館、一九九二年)、岩本通弥『戦後民俗学の認識論的変質と基層文化論』(『国

立歴史民俗博物館研究報告』一三三二、二〇〇六年)、など。

- (6) 「民俗学の歴史哲学」については、和歌森太郎『歴史と民俗学』(実業之日本社、一九五一年)、一〇頁に基づいて引用。

- (7) 『民間伝承論』では第七章「生活諸相」で、柳田の三分類の第一、物質文化の諸相を説明する中で、英国人が好んで使う custom は風俗習慣と訳されるが、お辞儀のようなどくに意識なしにする所作は、「習わし」の語義の外にある軽いものだ、という趣旨の議論がある。和歌森が倫理的な規範の背景に想定する Site とは、やや異なるかもしれない。

- (8) 和歌森の『日本民俗学』(弘文堂、一九五三年)では、Site に関してテンニースを参照して一九〇九年とする(同書一九頁)が、このパートでその著書ないし論文の書誌情報はない。この年だと、単行本 *Die Site* のことを指すと思われるが、和歌森は独語原書を読んだのかどうか。

- (9) 「氏神について」(『民間伝承』七一五、一九四二年)、「産神・氏神・祖先神」(『國學院雜誌』四八―六、一九四二年)。この両論考と『国史における協同体の研究』上巻の第三

- (10) 章との比較対照については、後考を俟ちたい。
一九五一年（昭和二六）七月に、前著『国史における協同体の研究』上巻と『中世協同体の研究』により文学博士の学位を取得した。「和歌森太郎年譜・著作」（『和歌森太郎著作集』別巻、弘文堂、一九八三年、二二二頁。
(11) 『和歌森太郎著作集』第三巻（弘文堂、一九八〇年）所収の西垣晴次による解説にも、「同じ協同体史観によるものとはいいながら、両者の分析態度にはかなりのへだたりが認められる」（四二四頁）、とある。
- (12) 伊藤幹治『『氏子』の社会人類学序説（上）』（初出一九七〇年、伊藤『宗教と社会構造』弘文堂、一九八八年）。和歌森が参照しているのは千葉県香取郡香取町の返田神社の事例で、その典拠とされるのが、原田敏明「当屋における氏神奉齋」（『帝国学士院紀要』一一一、一九四二年、一三二頁）。当論について筆者は、「戦時下における原田敏明の氏神祭祀論と柳田國男の頭屋制論」（『民俗学論叢』三五、二〇二〇年）で比較的詳しく検討したことがある。
- (14) 坂野徹『フィールドワークの戦後史』（吉川弘文館、二〇二二年）、二七頁、二九―三二頁、三九頁、五三頁。
日本民俗学会からの初年度の参加は、他に瀬川清子、直
- (15) 江廣治、櫻井徳太郎、竹田且。とくに竹田（一九二四―二〇二二）は、後の民俗総合調査で報告書の後書きを記すなど、和歌森を盛り立てていた。
- (16) 「和歌森太郎年譜・著作」（注10前掲）、二二二頁。
(17) 肥後和男は、和歌森の東京文理科大学での指導教官の一人であった。『修験道史研究』（河出書房、一九四三年）の序では、自らの修験道研究について、「昭和十一年の十二月頃から松本彦次郎、村岡典嗣、肥後和男三先生の指導を仰いでこの研究に着手しました」（四頁）とある。また、詳細までは不明だが、「和歌森太郎年譜・著作」（注10前掲）によれば、同大を卒業後、東京文理科大学助手となり、肥後和男教授の宮座研究を佐けたとされている（同書二〇―二〇二頁）。
- (18) 安代原に和歌森は「あんだいばら」とルビを打っている（初出時は片仮名で「アンダイバラ」）、ここではそれを継承した。実際には、「あんだいばら」と読むのではないかと思われる。『角川日本地名辞典一七 石川県』（角川書店、一九八一年）、八七頁。
- (19) 戦時下の「オモユとママハハ」（『民間伝承』八一―三、一九四二年）への板垣勇治郎という批判者に対する対応

に、そのような面があったと二〇二二年拙稿（前掲注3）の四八頁で指摘した。

(20) 柏木亨介「和歌森太郎の民俗学―民俗総合調査を中心―」（神奈川県国際常民文化研究機構での講演、二〇一〇年九月二五日）。配布資料が以下のURL

に置かれている。 [http://icfcs.kanagawa-u.ac.jp/news/ovubsq0000000w7-art/wakamori\(1\).pdf](http://icfcs.kanagawa-u.ac.jp/news/ovubsq0000000w7-art/wakamori(1).pdf)

(21) 淡路や若狭のように京都に比較的近い地域も選ばれたので、必ずしも周囲論が背景とばかりは云えないかもしれない。『西石見の民俗』の「あとがき」（竹田巨執筆）によれば、調査地の選定に非常に苦労したことが読み取れるので、結果的に調査事例になった地は、あるいは学生・院生の調査実習がし易い地域に過ぎなかったとも考えられる。

(22) 民俗総合調査のうち、学部生、高校教員、大学院生として、宇和、西石見、若狭、陸前、津軽に参加したという福田アジオは、「九学会連合というものがあつた上での調査方式」だと位置づけている。しかし、「私はあまりこの調査に大きな意味を見出しません」と否定的な評価を加え、その理由を「一〇日間くらいでは周りきれない、一日

一箇所、場合によっては午前と午後で別の場所に行く程度だった、という趣旨の発言をしていた。福田アジオ・菅豊・塚原伸治『二〇世紀民俗学』を乗り越える』（岩田書院、二〇一二年）、一二七―一二八頁。